

日常生活の中のスピリチュアリティ Spiritual but Not Religious

小松加代子

Kayoko Komatsu

要約: スピリチュアルではあるが宗教的ではないという言葉を手掛かりに、世俗化、個人化、という言葉だけでは説明できない現代宗教の捉え方を考える。既成の宗教団体への所属数や儀礼への参加者数の減少が指摘される一方で、ニューエイジやスピリチュアルと名付けられる活動への参加者が増加している。現代日本のなかで、スピリチュアルな考え方やスピリチュアリティに関心のある女性たちの日常生活における宗教性に焦点を当ててみたい。

キーワード: スピリチュアリティ、スピリチュアル、世俗化、宗教実践、日常生活

Abstract: There are people who tend to identify themselves as "spiritual" without identification with any religious institution. 'Spiritual but not religious' tends to characterize people today. Many researches on Spirituality has been discussed with the concept of secularization and individualization, however, we need to look at how people find the sacred or spirituality in their daily lives. This paper is based on the interviews with a group of women in Japan.

Keywords: spirituality, spiritual, secularization, spiritual activities, daily life

スピリチュアル、スピリチュアリティという言葉が日本で盛んに用いられるようになったのは、2000年以降である。その際に「スピリチュアル」に関心を持つ人々は宗教団体とは距離を取る、あるいは関係を持たないことを強調することが多い。堀江によれば、「宗教ではないスピリチュアル」が一気に流行語になったのは2007年である（堀江2011、4頁）。これは、「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」という言葉を使って、宗教がもつ否定的な要素を含まないものであることを示そうとしているともいうことができる。一方でこうしたスピリチュアルが「宗教」から距離を取っているからこそ、宗教的な深みがない、あるいは単なる一時的な流行にすぎない、さらには消費文化に利用されている、といった批判もついてまわることになる。伝統的な宗教的意味を一部切り取って利用するそのやり方では、宗教の深い意味を見失っているというわけである。

2008年の読売新聞の宗教観の調査によれば、日本人の56.3%が「人間の力よりも大きな何か」を信じると答えている。これを引用した堀江によれば、これは欧米のニューエイジの影響によるものではなく、民俗的あるいは伝統的なスピリチュアリティで、新しいというよりも、組織的な宗教とはそぐわない日本的な「民俗的なスピリチュアリティ folk spirituality」とも呼ぶべきもののだとして、新しいスピリチュアリティと区別をしようとして

いる (Horie, 2013, p. 104)。一方で島藺は、ニューエイジよりも広いスピリチュアリティの流れが存在しているとして、新しいスピリチュアル運動として捉えた。その後、スピリチュアルに惹かれていく人々の動きを、「個人主義的で共同行動が乏しいという点では、「運動」というよりは消費主義的な「文化」の新しい形態とみなした方が適切である」としている (島藺 2012)。

現代社会には、伝統的な宗教団体と、民俗的なスピリチュアリティ、新しいスピリチュアリティなどが混合した状態が存在していると考えられるが、ここではその分類や解釈まで扱うことはできない。本論では、同じようにスピリチュアルと宗教という言葉を通じて議論の続く英米の研究を概観しながら、世俗化、個人化、とは異なる動きとしてスピリチュアリティを考えてみたい。「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」という言葉を巡っての議論から、宗教的、スピリチュアルな生き方の問題に触れる。最後に一人の女性の生き方を例に、日常生活における宗教性を考える手がかりをみつけてみたい。

1. 「スピリチュアルではあるが宗教的ではない spiritual but not religious」

日本に先立って欧米では、宗教的教義や組織と密接な関係を持っていたはずのスピリチュアルという言葉が独立して用いられるようになった風潮をどう解釈するかが問われてきた。1980年代までは、主流であったキリスト教会への出席が急速に落ち込んでいることから、このまま宗教が衰退するのではないかと、とする世俗化という言葉との関連で多くの論争が交わされた。しかし、1990年代からは、教会への出席に限らず、それ以外の宗教性に関わる数値がすべて落ち込みを示しているとして世俗化の進行を論ずる人々がいる一方で、議論の方向が変化し、宗教という言葉の定義が問題であるとして、宗教は衰退するのではなく、変化をしているのだ、という主張が見られるようになる。その変化の一つが、宗教は個人化している、というものである。

たとえば、1990年代から「自己宗教 self religion」という言葉を用いていたポール・ヒーラスが、リンダ・ウッドヘッドと編集し 2005年に出版された『スピリチュアル革命 *The Spiritual Revolution*』という本は、現代社会における宗教的な状況について大いなる議論を呼んだ。この本では、イギリスのケンダル地方における大々的な調査をもとに、現代社会は、組織化された宗教の影響が減少し、次第に個人が直接聖なるものと向き合う「主観的な転換 subjective turn」へと向かっていると結論づけた。人々は社会的役割や期待に沿って生きる「～として生きる」生き方から、自分自身のユニークさや自分の深い経験に基づいて生きる「主観的生活」をするようになっていく、というのである。それを象徴する言葉として、「宗教」が「スピリチュアリティ」に道を譲ると表現された。

それまで宗教をとらえる際に、宗教的組織や教義、出席率といった目に見える量的な計測が可能なものを中心にしてきたのに対し、個人化された現代人は、個人のなかでそれぞ

れの解釈が可能となり権威を必要としなくなっただけで、個々人はそれぞれに宗教性を保っているという考え方である。これにはさまざまな反論・批判が出されている。なかでもスティーブ・ブルースは、ニューエイジに始まる新しいスピリチュアルな活動に参加したと思われる人の数は、全体の人口と比較して少数に過ぎない。そうした少数の活動を持って、宗教が変わったというのは飛躍しすぎだと批判する。教会への所属や礼拝への出席といった明確な指数以外に、何を宗教とみなすかがあいまいであること、さらには超越性を考えることや日常を超えたものを感じることにいったまとまりのない多様な言葉が宗教性に置き換わるというのでは意味をなさない。むしろ、宗教の社会的影響がなくなっていくという事実を認めるべきだという (Bruce, 2002)。

これに対してヒーラスは、ブルースの研究の中のスピリチュアリティ活動への参加者数の数え方が古い宗教の定義に寄ったもので、新しい動きを世俗的なものとして最初からみなしているにすぎないと反論している (Heelas, 2009)。

キリスト教が長く社会で支配的な影響力を持ってきた欧米社会では、キリスト教を前提とした尺度から離れにくい。しかし、その中でも、教会への所属や礼拝への出席、超越性といった定義そのものに宗教を限定してきてしまったのではないか、という反省が出されている。教会に所属することが保証する宗教性とは何か。公式な見解ではなく、一般信者の側に立った研究の必要性を主張する研究を次に紹介したい。

2. 宗教的理解とはなにか

人類学者のストリンガーは、信仰や信念という言葉がキリスト教の思想に基づいたものであるために、研究者はこれまで一般的な信者がどう考え、何を信じているのかに目を向けてこなかったという。そして、これまで宗教を測る際に使われていたキリスト教的な概念を取り払ってみれば、キリスト教会の信者となっている人々の中にも、その基底にある宗教的な感受性といったものがあって、その表現方法は変わっても、その存在は変化していないと考えている (Stringer, 2008)。

ストリンガーは、教会の信者たちの会話を注意深く聞き取る調査から、キリスト教の信者であると自認している人々が、キリスト教の教義とは矛盾する信念を持っていることに驚いた例をいくつもあげている。

たとえば、自分の子供に洗礼を受けさせようとする母親たちの会話を聞いていた時、死後に天国に行けるようにという祈りを込めて自分の子供には洗礼を受けさせる。しかし、洗礼式を終えると、その後教会に通おうとはしない。また、洗礼を受けていない他の子供たちが天国に行けるかどうかについては、神様は善だから、洗礼を受けていなくてもだれでも天国に行けるのだと答える。自分の子供に洗礼を受けさせるのは、天国に行くという確認を自分でできるのであればやっておきたい、というレベルのものにすぎない。だから

こそ、洗礼式という儀礼が終われば、教会に通うという日常的な行為は必要としていないのである。このような自分とは異なる宗教に所属する、あるいは同じような宗教的な行動をとらない人に対する非排他的な姿勢は、パットナムの著作でも触れられている。聖職者たちが異なる宗教を信じる人たちに対して排他的なのに対して、一般信徒の方が寛容な姿勢を見せることがあるという (Putnam, 2010)。一般信徒にとっては、他の宗教を信じる人たちと親しくなることによって、自分の信念を修正していることが分かる。

また、身近な人の葬儀において、死者が天国に行けるようにと祈りながら、その直後の会話の中で、輪廻の考え方を当たり前のように話す人々がいる。自分にとっては、天国に行くことはつまらなく思えるので、またこの世に生まれてくる方が望ましいと考えているようでもあるという。

ストリンガーによれば、研究者はこれまでキリスト教を信じることを公式の見解を基に作り上げてきたために、このようなキリスト教信者は単に信仰が薄い、あるいは教義を理解していない知識の少ない人々とみなしてしまったという。しかし、人々はその時々に必要なものを状況に応じて求め、その時の生き方に合った答えを複数の源から得ていたのではないか。実際に一般信者が日常生活の中で、どのように宗教的な意味づけをしているのかを調べてこなかっただけで、公式の見解とは異なる解釈が存在していたのはいつの時代にもみられることなのだ、とストリンガーはいう。ただ、時代による変化は起こり、キリスト教が社会の中で支配的ではなくなった現代は、悩みがあるときに頼るものが、かつての聖人や守護天使、イエスから、死んだ親戚や友人へと変化したのではないかと考えられる。

このようにストリンガーは、宗教的な信念は明確なものがひとつあるのではなく、いくつもの重なる層を作り出していて、世俗化は宗教的領域を減少させたというよりも、その複数のまたがる層を見えるようにしたのではないかと解釈するのである。今までも、これからも個々の信者は、まわりの情報を取捨選択しながら、それぞれ自分の信じるものを作り上げているという可能性を示している。

3. スピリチュアル仲間

スピリチュアルと宗教をめぐる論争の中で、一般の人々の言葉を調査の対象としたもう一つの研究に注目したい。社会学者であるナンシー・アーマーマンは、宗教の領域を特定のものに決めつけてきたために、研究者たちは日常生活が宗教的なものに満ちていることを忘れてしまったと考えている。世俗的な領域とされているところにも宗教的なものが存在していることに目を向けるべきではないかというのである (Ammerman, 2013)。

アーマーマンは、カトリック、プロテスタント、アフリカン・アメリカンプロテスタント、ユダヤ人、モルモン、ネオペイガン、どこにも所属しない人々 95 人に、インタビューを

し、宗教的、スピリチュアルと自分で考えることについて、日記をつけてもらったり写真を撮ってもらった。こうした調査に協力をしてくれた人々は中流階級の人々であり、数に限りがある点には限界があるものの、日常性のなかの宗教性をとらえようとする点では新しい試みである。

そこから分かったのは、人々は自分の人生を、聖なるもの、あるいは神など、特別な意味を持ったものとして語るのだが、それは日常のほんのひとつきに経験するものであることが多いことである。教会など宗教的な施設で祈るときに限らず、料理をしているときや、部屋に一人にいるとき、墓を掃除した時など、普通の生活の中の一コマで体験をしているという。

またアーマンは、スピリチュアルではあるが宗教的ではないという言葉から、単純に、宗教的組織を嫌って個人的なスピリチュアルに移動しているとみなすのは間違っている、という。宗教とスピリチュアルという言葉の捉え方は、人それぞれに異なっている。宗教的という言葉から、規則、儀礼、迷信に縛られているというイメージがある、という人々がいる一方で、宗教的であることとスピリチュアルであることを対立概念としてとらえていない人々も多い。たとえば、「神とつながる、という意味でスピリチュアルという言葉の方が適切だと感じる」という人や、宗教的というのは、何かをしているという行為を指すのに適切な言葉であるとして、スピリチュアルと宗教的という言葉の使い分けを行っていて、二択の概念とは考えていない。

アメリカ社会では、キリスト教会の教義や儀礼が宗教的な意味づけの源泉であることは多い。また慈善活動への参加も教会への出席率の多い人の方が多いというデータも見られる。しかし、宗教に所属していてもしていなくても、スピリチュアルであることを追い求めている点で共通している人が多い。

アーマンはスピリチュアルな仲間(Spiritual tribes)という言葉を用いて、聖なる意識は、伝統とか宗教団体などの制度化された人々の間でも、そして、スピリチュアルの基礎を共有していると認め合った人々の会話の中でも見受けられるという。聖なる物語は共通の絆、慣習、心情を共有する人々を橋渡しするものとなっている。

このようにアーマンは、既存の宗教的な領域に囚われていると、日常生活の中の聖なるあり方に気づかないとし、宗教組織が力をなくしていくこの現代世界の中で、個々人が聖なる意識と結びつくのか、世俗化理論は明らかにはできない、と締めくくっている。

4. 現代日本のスピリチュアルな女性の生き方

ストリンガーやアーマンの研究は、日常生活の中でどのように宗教的、スピリチュアルな体験が語られるかを調査したものだった。たとえキリスト教徒といっても、一人一人宗教的と感じる時も経験も異なっている。またその教義もそれぞれが独自に解釈をして取

り入れている。こうした日常的な宗教性を丁寧に見ていく必要があるのではないか。

ここで現代日本のスピリチュアルな考え方に共感して生きる女性たちの活動を見ることによって、伝統的宗教と世俗化された人々という単純な二分化によって見逃されてしまう生き方を考えるきっかけにしてみたい。

スピリチュアルな考え方に共感して生きる女性たちの活動に注目するのは、個人として聖なるものに向かい合うという現代的な特徴を持つことである。そこではそれを自分で選ぶということを積極的に行っており、選択できることの喜びを感じている。彼女たちは人、本、セミナーなど、さまざまな源から吸収しようとし、そして自分の経験との照らし合わせから自分に合ったものを組み合わせる。そこには、同じ価値観を共有する人とのつながりがあり、個人主義や共同性の否定とは異なる状況がみられる。

筆者はスピリチュアリティやヒーリングを大切に思う女性たちに話を聞いている。その全体の考察については別の稿にまとめる予定であるが、ここではそのうちの一人 A さんを例に、日常生活におけるスピリチュアリティについて考えてみたい。A さんは現在 70 代後半の女性である。ミッション系の学校で育ったことをはじめとして、キリスト教や日本の新宗教を経て、スピリチュアルな考え方と出会ったという。その点では、島菌のいう「伝統宗教から新宗教へ、新宗教から新しいスピリチュアリティへという流れ」を体験してきたともいうことができる。(島菌 2012、26 頁。)

A さんが精神世界に興味を持つようになったのは 40 代後半だった。そして、自分自身というものを発見したのは離婚が契機だった。個人を尊重してくれる両親ではあったが、10 代の頃はアルコール依存症の父親のもとで孤独を感じ、結婚した相手の男性は、世間体を気にする人で、妻や子供たちにさまざまな支配力をふるう人だったという。だんだん息が詰まってきたある日、全身で夫にぶつかっていき、夫は家を出ていくことになった。その後、家を出ていた長男と長女も戻ってきたある日、3 人目の子供が「初めて困らなくて言葉の意味がわかった」と言ったという。この子が生まれてからの 10 年間、家の中がずっと怒鳴り声と緊張感に満ちていたことに気づいた。そして離婚が想像以上の開放感を与えてくれたと、「長い刑期を終えて出所の日を迎えた人の気持ち」に似ているかもしれないと書き記している。さらに、A さんが発見したのは、自分自身だったという。

絶対君主だった夫と何とかうまくやって行くためには自分を無にして彼の機嫌を損なわないように四六時中気を遣い、彼に合わせて行くしかなかったのも、私は見かだけはとても優等生だったと思います。そして実際も自分はそういう人間だと思い込んでいました。・・・毎日が楽しくて自分でも知らなかった本来の自分がどんどん出て来て、それは決して立派なものではありませんでしたが決して不快ではなく、毎日が自己発見の連続でとても面白かったです。

こうして私は本当の自分を見つけ、それを受け入れて自然体で生きられるようになって

てから、それまでとは全く違う人生を、人の目や世間体を気にせず生きられるようになったのです。

こうして自分をみつけた A さんは、すべてをさらけ出すことによって、友人との深い関係が得られることにも気づいた。昨年日本では、ディズニー映画の「アナと雪の女王」の主題歌が大ヒットしたが、その歌詞にある「自分を認め、自分を信じて、飾ることのない素のままの自分で生きて行こう」という内容について、A さんは次のように綴っている。

スピリチュアルの世界を知り、そうした本などを読んで来た人たちにとっては「何を今さら～」と思える内容でしょうが、いつも他人の目や外からの評価を気にして生きて来た人たちにとってはおそらく初めてくらいの衝撃的なことだったのだと思います。・・・世間体や他人の目を気にしている間はそれはモンスターのよう巨大な存在で押しつぶされそうになりますが、気にしなくなったとたんスーッと消えてしまう幻のようなものなのです。確固たる信念を持って自分を信じて行動した時、他人は何も言わなくなります。少し呆れられるだけです。

結婚とは、夫婦とはどうあるべきか、という社会の規範に押しつぶされそうになったとき、そこから飛び出すことがその解決方法となったのだが、それに納得できるようになったのは、必死に生活を成り立たせていく中で直感に従って進んでいった先で見つけた体験からだった。

A さんは、子どもの頃ミッション系の学校に通っていたことから、キリスト教の環境になじみがあり、20 歳にときに洗礼を受けている。ミッション系の学校では女性も働くことが奨励されていたといい、A さんの生きる意欲もそこに源があるのかもしれない。洗礼を受けることは友達に誘われたというが、キリスト教の教義に惹かれてというよりも、讃美歌が与えてくれた聖書の言葉が自分にとって大切なものに思えたからだという。なじみのある教会から遠くに引っ越しをすると同時に、教会から離れていった。その後、子育てなど悩んだときに教会に入って行ったこともあるが、その雰囲気と讃美歌が癒してくれたのであって、キリスト教という団体や教義ではなかったという。なかでも讃美歌が教えてくれた「乗り越えられない試練はない」という言葉には慰めを得られた。

また、A さんは新宗教にも入ったことがあるという。しばらく子どもと一緒に通ったものの、そしてまた別の宗教団体にも行ったことがあるが、どれも人間の作った組織や規則が煩わしく思えてやめたという。またいわゆるコミュニンの一つにも行ってみたがなじまなかった。

それに対して、60代で行ったヨーロッパで一番大きなスピリチュアル・コミュニティと言われるフィンドホーンは全く違っていったという。フィンドホーンでは、1週間の滞在中に行われるシェアリングでは、安心して自分を見せることができる。何を言っても批判

やジャッジをされずに受け入れてくれるという安心な場所だったという。この感激をした体験から、すぐに翌年にはフィンドホーンへのツアーを自分でオーガナイズするという活動を生み出すことになる。

Aさんにとっては、宗教団体の中にも魅力的な一面はあるものの、その団体が自らを維持するために作り出した規則や組織が、自分の求めるものに沿わないという点で明確に分けられている。Aさんの書かれたものには、次のような言葉が並ぶ。「いくら何千年もの歴史があるからって、なぜ宗教、民族、国家、伝統などに拘泥するのだろう。なぜそんな狭いところに閉じこもって「我こそ最善」と思い込んでいるのだろう。」「わけもなく涙が出るほどの感謝が天地と自分の間で循環していると「教え」は要らないし、むしろうっとうしくさえ感じる。・・教えられてする感謝は真の喜びにはつながらないし、それができない時には罪悪感を生む。」

自分を発見したAさんは、直感で決断し動くことができるようになった。必要な時にふと気づくものが現れるという。そして自然食品店を開き、やがて閉店し、その後北軽井沢で店を開いた。自然食品店には自然と似た考えの人が集まることに気づいた。そしてスピリチュアル系の本を置くと、同じ考えの人が声をかけてくれるようになった。自然食品とエコは結びつき、政治的な意識が高い人との交流が始まった。

さらに自分が良いと思われることをすぐに活動に結びつけるようになった。その活動の中で出会った人々とのつながりが今日までも続いている。フィンドホーンツアーで出会った人、その後ピースポートに参加して知り合った人、自然食品店を経営していた時に出会った人、高原でカフェを開いていた時のお客さんなど、さまざまな場所では出会った人々とのつながりがずっと続いている。

こうしたつながりは、組織が作り出す関係とは異なるものの、個人主義と名づけられるものとも大きく異なっているということができるだろう。私がAさんと出会ったのも、他のスピリチュアルな活動をしている方からの紹介だった。

このAさんのエネルギーはどこから来るのだろうか。Aさんによれば、スピリチュアルな考え方が、昔からの道徳観を吹き飛ばして、新しい風を吹き込んだという。それまでの「人生は幸福になるためにある」「自分もよし、人もよしというのが本当だ」「見返りを求めない無条件の愛こそが至上」などの「～でなければならない」的な宗教的道徳観にしばられて苦しかった。とはいえ、古い時代の価値観をすっぱりと脱ぎ捨て、新しい考えのもとにいきるようになるまでかなりの年月がかかったが、その結果は、「意識が広がり、差別や比較がなくなり、パワーにあふれ、健康でイキイキとした生活を送ることができ、願いことは全て叶い、人からは若いと言われ、毎日が喜びと感謝に満ち溢れるようになった。過去に囚われず、未来を案ぜず、何が起きてもそれはベストなことなのだ」と常にポジティブに考えられるようになったという。

5. これからのスピリチュアリティ研究に向けて

ロバート・ウースナウは、スピリチュアリティという言葉そのものが明確な定義を持っていない状態であることは認めつつ、現代の宗教を考えるには、組織的な存在への調査よりも、個々人の日常生活におけるスピリチュアルな実践に焦点を向けて、そうした実践が社会的にどんな次元に関わっているのかを考えていくべきだと述べている。スピリチュアルな実践とは、自分のスピリチュアリティに目覚めていくために、あるいは自分のスピリチュアルな生活をより豊かにし成長させるために個々人が行う行動、とする。これまでの宗教研究は、こうしたスピリチュアルな実践を注目してこなかった。ウースナウは、個々人のスピリチュアルな実践の研究を進める必要について、次の3つの理由を挙げる。まず研究者は、人々が何をし、その行動をどのように理解しているかわかっていないことを自覚し、第2に、曖昧な言葉を巡って一般論を引き出そうとしているばかりだったので、具体的に目に見えるスピリチュアルな実践の研究を進めて、議論の材料を増やすべきである。そして第3に、宗教組織とスピリチュアルな実践との関係は大きく変化しているのは明らかで、スピリチュアルな実践の場は、宗教団体の儀式の中よりは、個人の日常生活の中へと移っていることに注目し、その社会的意義を考察すべきである (Wuthnow, 2001)。

先日ふと書店で目に留まった本を購入し読んでいたところ、「あなたは生まれたときからすでに完ぺきだったのです。何の足りないものもなく、何も余計なものなど最初からないのです。あなたが何をしようと、何をしなかりうと、あなたは、そのまま価値のある存在です。・・・生まれたときからすでに完ぺきな存在である私たちは、ありのままの自分でいさえすれば、いつもまっすぐ自分軸で大地に立っていることができます。」という文章が出てきた。この言葉が、その直前に話を聞いたスピリチュアルに関わる女性の言葉と全く同じフレーズであったことに驚いた。というのも、この本の著者はカトリックのシスターだったからである。所属している宗教に関わらず、スピリチュアリティの方向性は似ているのか、あるいは時代的に多くの人に使われるフレーズだからなのか、さらに慎重な調査が必要とされている。

個々人のスピリチュアルな実践の調査が必要とはいえ、フェミニスト神学について書いた岡野の次の言葉には心を留めておきたい。

スピリチュアリティを求めるからといって、共同体そのものを否定しているわけではない。・・・今日スピリチュアリティを求める人々は新たに意味づけられた共同体を志向するのである (岡野 2003、230 頁)。

新たに意味づけられた共同体が存在し得るとすれば、前に引用した次の言葉は再考が必要となってくるだろう。「自分が変わること満足して、他者と行動を分け持ち、仲間と他者に対して責任を取るという立場を引き受けようとしないうとして、個人主義的で共同行動が

乏しい」(島菌 2012、21-22 頁) ウッドヘッドは、スピリチュアルな活動は、独立し自立した自己を確立することと同時に、今以上の関係性を作り上げ、互いの自己の共有を得る練習の機会を提供してもいると指摘している(Woodhead, 2008)。ウッドヘッドの言葉を借りれば、スピリチュアルな実践が、日本においても宗教の個人化ではなく「関係性 relational の宗教」(Woodhead, 2009) へと向かうのかどうか、今後の研究の課題としたい。

付記：本研究は JSPS 科研費 26370066 の助成を受けたものです。

参考文献

- *A さんとは 2013 年 8 月 23 日にお会いしてお話をうかがった。それに加えて、A さんのブログや著書を引用させていただいた。引用については、ご本人の承諾を得ている。
- 岡野治子「フェミニスト神学の視点から社会倫理を再考するースピリチュアリティ・平和をめぐって」湯浅泰雄監修『スピリチュアリティの現在 宗教・倫理・心理の観点』人文書院、2003 年。
- ポール・ヒーラス「資本主義のカルト 自己宗教・魔術・ビジネスの強化」『東洋学術研究』128 号、1992 年。
- 島菌進『現代宗教とスピリチュアリティ』弘文堂、2012 年。
- 堀江宗正『スピリチュアリティのゆくえ 若者の気分』、岩波書店、2011 年。
- 鈴木秀子『あなたは生まれたときから完璧な存在なのです。』文春新書、文芸春秋社、2014 年。
- Ammerman, Nancy T.(2013) *Sacred Stories, Spiritual Tribes: Finding Religion in Everyday Life*, Oxford University Press.
- Bruce, Steve(2002) *God is Dead: Secularization in the West*, Blackwell.
- Heelas, Paul & Woodhead, Linda et al. eds.(2005) *The Spiritual Revolution: Why Religion is Giving Way to Spirituality* (Religion and Spirituality in the Modern World), Wiley-Blackwell.
- Heelas, Paul(2009) Spirituality of Life, in Peter Clarke (ed.) *The Oxford Handbook of the Sociology of Religion*. Oxford: Oxford University Press.
- Horie, Norichika(2013) 'Narrow new age and broad spirituality: a comprehensive schema and a comparative analysis,' *New Age Spirituality rethinking religion*, eds. By Steven J. Sutcliffe and Ingvild Saelid Gilhus, Acumen.
- Putnam, Robert D. and Campbell, David E. eds.(2010), *American Grace How Religion Divides and Unites Us*, NY: Simon & Schuster.

- Stringer, M.D.(2008) *Contemporary Western Ethnography and the Definition of Religion*, Continuum International Publishing Group.
- Woodhead, Linda(2008) 'Religion and Women's Changing Lives in the West,' *Women and Religion in the West*, eds. by Kristin Aune, Sonya Sharma, Giselle Vincett, Ashgate Pub Co.
- Woodhead, Linda(2009) 'Feminism and the Sociology of Religion: From Gender-blindness to Gendered Difference, in Peter Clarke (ed.) *The Oxford Handbook of the Sociology of Religion*. Oxford: Oxford University Press.
- Woodhead, Linda(2011) 'Spirituality and Christianity: The Unfolding of a Tangled Relationship,' in Giuseppe Giordan & William H. Swatos, Jr. eds., *Religion, Spirituality and Everyday Practice*, Springer.
- Wuthnow, Robert(2001) 'Spirituality and Spiritual Practice,' Richard Fen ed. *The Blackwell Companion to Sociology of Religion*, Chapter 17, Blackwell Publishing.

Received on January 5, 2015.